

移動とメディアの中のアジア近代文学 要旨

佐野正人

本研究では主に日本、朝鮮、中国という東アジア地域の近代文学の発生と展開を扱う。時期的には一九世紀の末から戦争期を経て「戦後」の時期までを対象とし、また地域的にも広い範囲に渉るため、まず序章「アジア近代文学の始まり——移動とメディア的展開の中の近代文学——」において「アジア文学」の範囲と性格について、概論的に論述する。また、なぜ「アジア文学」が共通した性格を持っているのかについて、「帝国主義」が東アジアに波及した一九世紀末のグローバルな文脈の中で発生したという共通のコンテクストを東アジアの各国文学が持っていることを示す。本研究ではそのようなアジア近代文学の持つ国際的な文脈を「人の移動」と「メディア」という視点から考察していくため、そのような基本的な視角について述べる。

第一章「移動の時代とアジア文学の展開」では、主に日本文学の側からアジアのグローバルな文脈やアジアの人的、知的なネットワークに対応して、日清戦争以後の日本文学があったことについて論述する。主に日清戦争以後の日本への留学生の急増の中で東アジアの国境を越えたネットワークが形成され、その中で魯迅や李光洙らの「アジア文学」が生成したことなどを焦点として取り上げる。また、満州事変以後の一九三〇年代の日本において国境を越えた人々（＝ディアスポラ）が作り上げた「近代」というテーマが扱われることになった文脈を島崎藤村や石川達三の小説に即して論じる。

第二章「韓国モダニズム文学の位相」では、主に一九三〇年代に活躍した李箱、鄭芝溶、金起林らの朝鮮のモダニズム文学者たちを対象として、逆に朝鮮文学の側からアジアのグローバルな文脈に対してどのような対応があったのか、そして朝鮮の側から見た人的、知的ネットワークの様相について考察する。主に朝鮮のモダニズム文学者たちは日本と韓国という多言語的な空間の中で文学的活動をしていくが、彼らの文学的対応はそれぞれ異なるニュアンスを持っており、特に「日本（文学）」に対する対応は興味深い性格を持っている。本研究では李箱という日本語詩を多数制作した詩人を中心的に取り上げ、彼の「日本（文学）」に対する対応と、その中で文学的な主体化を目指した試みを追っていく。また、彼が晩年に東京に渡り、日本の表面的な「近代」に失望したあり様などを論じる。

第三章「フィールドとしてのアジアと戦後日本」では、狭義の文学を離れて、植民地期の朝鮮の言語的な様相や「戦後」の東アジアの文化的変容など、文化的なフィールドとしての東アジアを主題化する。植民地期の朝鮮は「日本語」と「朝鮮語」が混在しヘゲモニー闘争を行う場であったが、そこにおいて「英語」はどのような位相を持っていたのか、また「英文学」はどのような意味を持っていたのかについて考察する。植民地からの自由や解放を模索するツールとして「英語」や「英文学」が機能したことについて見て行く。また、日本の敗戦後、東アジアで大規模な民族移動が起き「引揚者」（日本）や「帰還者」（韓国）が数百万人の規模で移動したことが、それぞれの社会や文化にどのような影響を与えていったのかについて見る。彼ら／彼女らの経験はグローバルな文脈を「戦後」の国民国家や国民文化に内在化させることによって、それぞれの「戦後」にヘテロジーニクス

(異種配合的) な性格を与えることになったことを見る。

以上のように、本研究の中心課題としてはアジアの近代文学におけるグローバルな文脈がどのように作用し、その中で個々の文学者たちや「引揚者」「帰還者」たちがどのように対応していったのかを考察し、それが各国の社会や文化にもたらした影響について考察することを挙げられる。そのことを本論ではアジアにおけるトランスナショナルな領域と捉え、それがどのようにナショナルな「国民文化」「国民文学」を変容させていったのか、を大きな主題としているということが出来る。また、終章では「戦後」の韓国や台湾、中国にもたらされた異種配合的な文化のあり様についてや、二十一世紀のアジアの文学や大衆文化、映画というフィールドでの再主体化のあり様など、今後の検討すべき課題について触れる。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	佐野 正人
論文審査担当者	(主査) 教授 佐藤伸宏 教授 佐倉由泰 教授 佐藤弘夫
論文名	移動とメディアの中のアジア近代文学
<p>本論文は、日本、朝鮮、中国を中心とする東アジア地域の近代文学の成立と展開について、〈移動〉と〈メディア〉という視点を軸として、多角的な考察を加えたものである。</p> <p>論者は、その分析にあたり、旅行や留学、移住、翻訳、植民地の文学及び言語における異種混交的性格、多言語的空間、植民地に設置された帝国大学その他、極めて多様な論点を設定することによって、トランスナショナルな文脈を共有するなかで成立したアジア近代文学の第二次世界大戦後に至る展開の諸相を鮮やかに照射している。論文全体は、序章以下、本論部全3章15節で構成される。</p> <p>序章では、アジア近代文学について、国家を超えるトランスナショナルな領域の共有においてその成立と展開が果たされたことを確認し、本論の考察対象を規定する。第一章「移動の時代とアジア文学の展開」は、日本・朝鮮・中国の三地域における人及び文学の移動と交流に視点を据えながら、アジア近代文学の成立と展開に関わる多様な問題について、とくに日本文学を軸として論じる4節から成る。第一節では明治期におけるアジア諸地域への移植民、第二節では日本への留学生の存在を焦点化し、日清戦後の明治三〇年代に多文化的でハイブリッドなアジア近代文学が成立したことを指摘する。第三節は1930年代の東京・上海・京城など東アジア諸都市が共通のコンテクストを形成していたことを前提としつつ、しかしそれぞれの地域で生まれた文学が相互に差異や捻れを孕んでいたことを、横光利一、茅盾、李箱その他の文学の分析をとおして確認している。第四節では島崎藤村や石川達三の作品を参照する中で、1930年代の近代文学におけるディアスポラの旅の主題化という状況を照らし出す。「韓国モダニズム文学の位相」と題された第二章は、李箱、鄭芝溶、金起林など1930年代の朝鮮で活動したモダニズムの詩人たちについて、とくに李箱を中心として分析を加えた6節で構成されている。そこでは、李箱における安西冬衛のモダニズム詩の受容、李箱の詩の日本語に見られる意図的な誤用ないし歪曲、朝鮮モダニズム文学者の団体「九人会」のメンバーの日本留学体験、朝鮮モダニズム詩人の翻訳的創作における多言語的性格その他、極めて多様な論点に基づく考察がなされる。それらをとおして、日本のモダニズムの影響を受けつつも、朝鮮と日本を跨ぐトランスナショナルな空間において生成した朝鮮モダニズムの諸相が明らかにされている。第三章「フィールドとしてのアジアと戦後日本」には、比較文化論的な観点から改めてアジア近代文学を包括的に論じる5節が配列され、京城帝国大学や戦後の引揚者／帰還者等々、種々の論点を通じて脱領域的で文化混成的なフィールドとしてのアジア近代文学の本質的性格を確認している。</p> <p>アジア近代文学については近年旺盛に研究が進められているが、本論は、多岐にわたる問題を視野に入れた分析によって多くの新見を提示しており、斯学の発展に寄与するところ多大である。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	